

## 精神科とらじもの

精神科の病気は、血液検査や画像でただちにわかるものではありません。病気の原因もわからないことが多く、したがって治療法も手探りにならざるを得ないため、結果的に病気が長期にわたることがあります。

最近ではICD（世界保健機関<sup>W</sup>）とかDSM（米国精神医学会）の診断基準が精神科にも適用され、それをもとに診断が統一され、また薬のはたらきも徐々に解明されて、よく効く薬も出てきました。しかし、結核や糖尿病のように治療法が確立しているかという点、残念ながら精神科ではまだまだです。

このあたりの精神科の独自性がよく表れているのは、「患者」を「クライアアント」（相談者・依頼者）と呼ぶことです。これはもともと臨床心理学のカウンセリングから始まった呼び名ですが、精神科でも最近では使われるようになりました。医者と患者と

いう、いわゆる縦の関係（最近はその科のお医者さんもやさしくて、そんなことはないようですが）ではなく、横並びの対等な関係です。また「治療」といわずに「寛解<sup>※かんかい</sup>」という用語を使うように、かなりあいまいな領域です。「精神科にかかりたいけど、どこの病院、クリニックがいいですか」「どんなお医者さんがいいですか」といった質問をよく受けますが、残念ながらどこがいいとは一概に言えません。長いお付き合いになるかもしれないので、「自分に合うと思う」先生が一番だと思います。

京都大学医学部附属病院の私の担当の日や龍谷大学のクリニックには、四国や九州からわざわざやって来られる方があります。いちばん遠くからは香港、マレーシアです。「なんでそんな遠くから？」と不思議に思いますが、精神科医は手術をするなどの技術が必要なわけではなく、私の場合はあまり薬を出さずに話をするだけです。たぶん感覚的に「合う」と判断されるのでしょう。私のところに来られるきっかけは口コミが多いような気がします。

※寛解 病気そのものは完全に治癒していないが、症状が一時的あるいは永続的に軽減、または消失すること。